

経済学を志したきっかけ

皆さんの中で、大学で経済学をやりたい、という確固たる信念、目的をもって入学してこられた方はどれくらいいらっしゃるでしょうか。高校までの段階では、将来の進路の希望や展望をしっかりと、というのはなかなか難しいものです。何となく経済学部に入ってきてしまった、という人も多いのではないのでしょうか。

かくいう私も、大学受験の頃には文学部を目指すか経済学部を目指すか迷っていました。結局、経済学部を受験してこの道に進むことになりましたが、思えば当時、なぜ経済を選んだのか、今となってはあまりよく覚えていません。高校で学ぶ科目の中で一番好きなのは歴史、特に世界史でしたので、文学部の史学科に進むという選択肢も十分に考えられたのですが、何となく勢いで経済を選んだのかもしれない。それで、いざ大学に入学してみると、周囲の友達も似たようなもので、経済学部に在籍しながら司法試験を目指している人、哲学に傾倒している人、等々で、あまり経済学に興味をもっている人はいませんでした。私も一応は、ということでミクロ経済学のテキストを読んでみたのですが、あまりの退屈さに途中で放り出してしまいました。素人目にはどうにも説明がウソ臭く、惹かれるものがなかったのです。それで結局、1年の頃は歴史の本ばかり読んでいました。当時、座右の書としていたのが宮崎市定『中国史(上・下)』(岩波全書)でした。

そんなわけで、経済学との出会いはあまり素敵なものとは言えませんでした。印象ががらりと変わったのが、後に指導教官となる教授の一連の著作を読んでからです。これまで空虚なものに見えた経済学説を生み出した人物の実像、その時代背景、思想といったものに触れることで、ようやくその意味がわかってきたのです。それは私に経済学の魅力を教えてくれると同時に、歴史好きとしての興味も満足させてくれるものでした。

経済学は面白さがわかるまでに時間のかかる学問です。すぐに、とは言いません。卒業するまでに、皆さんにその醍醐味を少しでも伝えられたらと思います。



■学問研究入門
■経済学方法論 I・II

伊藤 宣広
(いとう のぶひろ)

経済学部講師。1977年生まれ。京都大学大学院経済学研究科博士後期課程修了。京都大学博士(経済学)。担当科目は経済学方法論、市場と経済。イギリスのケンブリッジ学派の経済理論・経済思想を研究している。